

Title	<山がつ>めく光源氏 : 須磨流離の姿
Author(s)	岡田, ひろみ
Citation	詞林. 2004, 35, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67512
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈山がつ〉めく光源氏

——須磨流離の姿——

一

『宇津保物語』の俊蔭は、唐から帰国後、一世源氏を妻とし一女をもうける。娘は、容姿・心ばえともに申し分なく育った。

このほど、家貧しくして、思ふほどにしたりせず。十二、三になる年、容貌、さらにいふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ。心のらうらうしきこと、世に聞こえ高くて、帝、春宮、父に召す。娘にも御文たまへど、我も御返事聞こえず、娘にも御返しもせさせず。さらぬ上達部、親王たちは、まして御文見入るべくもあらさず。

(俊蔭①四四〜四五頁)

あたりが「光り輝」く程の美しい娘の噂が広まり、帝をはじめとする人々に求婚されるが、俊蔭は喜ぶどころか、聞き入れもしなかった。しかも、

「娘は、天道にまかせたてまつる。天の掟あらば、国母・女御ともなれ。掟なくば、山賤、民の子ともなれ。」

岡田 ひろみ

我、乏しく貧しき身なり。いかでか高き交じらひはせさせむ」といひて、よき人のたまへど、耳にも聞き入れず。

(俊蔭①四五頁)

と、すべて「天道」に任せる、と言って俊蔭自身が娘の結婚に関わることを避けるのである。「天の掟」があるならば「国母・夫人」になるであろうし、なければ「山賤・民の子」になって良いという。実際、俊蔭死後も入内はせず、俊蔭女は「北山」のうつほで息子仲忠と生活するのだから、夫兼雅に発見されるまで、「山賤・民の子」として数年過ごしたといえるかもしれない。

ただ後に、俊蔭娘は藤原兼雅の最愛の人となり、帝に望まれて尚侍として宮中に参内、琴の奇瑞により正二位を与えられることを勘案すると、言わば「国母、女御」と「山賤、民の子」のどちらでもあり、どちらでもない存在として、物語世界を生きた女君であるとも考えられる。

「山賤」は、女性として最高の地位である「国母」の〈対〉概念として選ばれている。その場合の「山賤」にはきわめて

否定的な、負のイメージがつきまとう。当時の貴族が最低の地位として想定し得る最底辺の人々を指す言葉である。「天道」により、「山」に埋もれたはずの俊蔭娘が、「山」を出て「都」に、そして宮中に組み込まれてゆく。そこに、「山賤、民の子」／「国母、女御」という相対する要素を背負う俊蔭娘の姿が浮かびあがってくる。

ところで、『源氏物語』には、「山賤」としての生活を送りながら、臣下として上り得る最高の位、准太政天皇になった人物がいる。光源氏である。

絵合巻。弘徽殿方と梅壺方に分かれ、冷泉帝の御前で絵合が実施される。周知の通り、光源氏の描いた須磨の絵日記により、梅壺方が勝つことになる。その後、判者であった蛭兵部卿宮に対して、光源氏が絵について語る。

「……。絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きてみるべきと思ふをりはべりしを、おぼえぬ山がつになりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひよらぬ限なくいたられにしかど、……」と、親王に申したまへば、(絵合②三八八頁)

「おぼえぬ山がつになりて」とは、須磨での生活をさす。「山がつ」になつて須磨・明石を流離したことで、「思ひよらぬ限」がない程絵を描くことができたという。

また、朝顔巻でも、光源氏は須磨での生活を、自分自身を

「山がつ」として想起する。

「山がつになりて、いたう思ひくづほればべりし年ごろの後、こよなく衰へはべるものを。内裏の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御推しはかりになむ」と聞こえたまふ。(朝顔②四七三頁)

「山がつになりて、いたう思ひくづほればべりし年ごろ」とは、須磨・明石を流離した時のことを暗にいったものである。ここで光源氏は、女五宮に容姿を絶賛されたのを受け、須磨流離の数年ですっかり衰えてしまったと卑下する。

絵合巻にしろ、朝顔巻にしろ、須磨を流離した光源氏を一貫して「山がつ」として描いている点は看過すべきではない。絵合巻の場合、「四方の海の深き心」を見た光源氏が、「海人」ではなく、「山がつ」として描かれている。そのような違和感をあえて全面に出すかのように、須磨での光源氏を「山がつ」としてとらえる姿勢は強固といえる。

二

須磨行き準備をする光源氏の姿は、次のように描かれる。

かの山里の御住み処の具は、え避らずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそきて、またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。ところせき御調度、はなやかなる御よそひ

などさらに具したまはず、あやしの山がつめきてもてなしたまふ。
(須磨②一七六頁)

光源氏は、「山里」住まいの準備品として、「さるべき書ども」「文集など入りたる箱」「琴一つ」のみを持参する。その姿は「あやしの山がつ」めいていた。

既に、光源氏の須磨での生活が「山がつ」として描かれていることについての論はいくつか提出されている。根本智治氏は、「山がつ」としての光源氏の姿と白居易の盧山草堂の生活を対照させることで山がつとしての光源氏像を位置付け、津島昭宏氏は、「漂白する神人」「山がつ(＝マレヒト)」としての光源氏の姿をそこに読みとる。確かに、折口信夫がいうように、かつて「山人」は神としてとらえられていた。ここでの「山がつ」に、神としての光源氏の姿を透かし見ることはできるだろう。

光源氏の姿は、「あやしの山がつ」めいていた、と語られる。その点について、津島氏は「源氏は、自身もその身となつて、山がつという民衆世界を取り込みつつも、それはあくまで「すめく」の時点にとどまっており、完全にそこに同化しているわけではなかった」とする。だが、「すめく」とは同化・非同化というよりもむしろ、光源氏を何かにほっきりと名付け得なかつた事が窺える表現なのではあるまいか。物語世界で、光源氏自身が須磨での生活をふりかえる時、そこに「すめく」の言葉はない。「すめく」は、語り手(他者)

から光源氏を見た時にのみ付される表現であることに注目すべきなのではなからうか。「あやしの山がつめきて」とは、言わば語り手から見た光源氏の姿に他ならず、光源氏自身が意識的に「山がつ」に扮したのではない。つまり、まさに今の光源氏は、(あやし)のもの、畏怖の念を感じる得体の知れないものとしてあった。それは、「あやしき(卑しい)山がつ」ではなく、「あやしの山がつ」である所からも読み取れる。「山がつ」とさえも名付けることができない、人知を越えたものであるために、(あやし)の(山がつめく)、と言いつた表されているのであろう。このような、光源氏の山がつめいた姿は、以後、物語でどのように描かれるのか。

本稿では、物語の表現の論理として「山がつ」と光源氏が、どのように切り結ばれてゆくのか、具体的に読みといてゆきたい。

次に、光源氏が須磨に下る直前、春宮に和歌を贈る場面を引く。

明けはつるほどに帰りたまひて、春宮にも御消息聞こえたまふ。王命婦を御かはりてとさぶらはせたまへば、その局にとて、

「今日なん都離ればべる。また参りはべらずなりぬるなん、あまたの愁へにまさりて思うたまへられはべる。よろづ押しはかりて啓したまへ。

いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつに

して」

桜の散りすぎたる枝につけたまへり。(須磨②一八二頁)

「今日なん都離ればべる」「また参りはべらずなりぬる」との言葉が、王命婦の、そして読者の胸を刺す。二度と会えないかもしれない悲しみを、さらに和歌でも詠む。その一首は、従来言われるような「いつか再び春の都の花を——東宮のめでたいご時世を見ることができるとしようか」という単なる疑問ではなく、「いつ見ることができようか、いやできまい」といった光源氏の絶望の深さが詠み込まれた和歌であろう。「時うしなへる山がつ」が、都に戻る可能性は闇に包まれている。「桜の散りすぎたる枝」に付けられた贈歌。

光源氏は「山がつ」として須磨の地に向った。須磨での住まいは、

おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける
家居近きわたりなりけり。海づらははやや入りて、あはれ
にすぎげなる山中なり。

(須磨②一八七頁)

と、あるように「海づら」の近くではなく「あはれにすぎげなる山中」にあった。須磨が、地理的に海辺でもあり山辺でもあることはそれとして、光源氏が「山がつ」であったからこそ、源氏の住まいが「あはれにすぎげなる山中」であることが語られたと言えよう。

須磨の「山中」の住び住まいが長くなるにつれ、光源氏は

紫の上がそばにいない寂しさをかみしめる。

かの御住まひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、わが身にだにあさましき宿世とおぼゆる住まひに、いかでかは、うち具してはつきなからむさまを思ひ返したまふ。所につけて、よろづのことさま変り、見たまへ知らぬ下人の上をも、見たまひならぬ御心地に、めざましう、かたじけなうみづから思さる。煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわたるは、おはします背後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

山がつのいほりに焚けるしばしばもこと問ひ来なむ
恋ふる里人 (須磨②二〇七―二〇八頁)

波が寄せては返すように、紫上を呼び寄せようかと考えては「思ひ返す」光源氏の内面の逡巡が描かれる。煙が住まいのそば近くに立ち来るのを見て、「これや海人の塩焼くならむ」と思い続けていた。それは光源氏の念頭に、

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなび
きにけり (古今和歌集 七〇八・恋)

との詠があったことによる。その点で光源氏が、煙を見て、「これや海人の塩焼く煙をならむ」と思うのは自然な感慨のように思われる。

だが、それが光源氏の思い違いであったことを、物語は改めてここに叙述する。海人の煙ではなく、光源氏の背後の山

で「山がつ」が、「柴といふものふすぶる」煙であったのである。「めづらか」に感じた光源氏は、和歌を詠んだ。光源氏の本意は、恋しい人の来訪を願う下の句にあるが、上の句は下の句を導くだけのものではなく実景を詠み込む。その実景とは、「山がつのいほりに焚ける」柴の煙が、光源氏のそばに「いと近く」「立ち来る」風景であった。その意味で、この場の「山がつ」は限りなく光源氏に近いものとして造型されていると言えよう。「山がつ」との交感・交通により、光源氏が「山がつ」と同位相のものとして位置づけられているのである。

さらに、須磨の光源氏の「山がつ」としての姿は、再度他者の視線によっても確認されることになる。都での非難も顧みず、頭中将が光源氏のもとを訪問する場面がそれである。

住まひたまへるさま、言はむかたなく唐めいたり。所の
さま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、
石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをか
し。山がつめきて、聴色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、
指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びてもてなしたま
へるしおいみじう、みるに笑まれてきよらなり。

(須磨②二二三頁)

引用した部分は頭中将によってとらえられた、光源氏の住まいの様、そして姿である。住まいは「唐めき」、光源氏は「山がつめき」でその場に居る。光源氏の生活や姿は、白居

易の草堂での隠者生活が重ねられながら絵画的な文章により表現されている。そして、頭中将によって、語り手によって光源氏は「山がつ」めき、その姿が「きよら」と認識される。周囲の視線に、光源氏が「山がつ」めいているにもかかわらず「きよら」と映るのはなぜであろうか。言わば異形の人である「山がつ」は「きよら」と相いれるのであろうか。

「山がつ」めく光源氏は、聴色の「黄がち」な下襲、「青鈍」の狩衣、指貫を身につけていた。「うちやつれ」「田舎びて」もてなすその姿が、「みるに笑まれてきよら」なのであった。「きよら」の鍵は、この服装にあるように思われる。

光源氏の衣服の色については、『孟津抄』が「西宮記云黄衣無品親王孫王」、「小野篁も自配所被召返無位の人にて着黄衣」と、「黄がち」であったことを積極的に読む。現在通行の諸注釈書では特に問題視される箇所ではないが、この『孟津抄』の読みの姿勢は重要であろう。ただし、「黄がち」なのは下襲であり、光源氏が「青鈍の狩衣、指貫」を着ていたことを考慮すれば、光源氏の衣服は「黄衣」というよりもむしろ「青衣」といえるのではあるまいか。

「青衣」は、『礼記』『月令』に「孟春之月、(中略)天子……衣青衣、服蒼玉」にあるように、中国において、天子が春に着る衣であった。

光源氏がかつて帝位(天子の位)を嚮望された人物でもあった。にもかかわらず、須磨を流離する。「賤」にして

「聖」、まさに光源氏その人であろう。

そして「山がつ」は、日本において例えば次の様に詠まれてもいた。

試みに冨塵の処を出で、追ひ尋ぬ仙桂の叢。

巖谿俗事無く、山路樵童有り。

泉石行々異にして、風烟処々同じ。

山人の業を知らまく欲りせば、松下に清風有るといふこととを。

この詩から、「樵」や「山人」が、仙人と同義でとらえられないが、山に住む者である点で類同する。当該場面において、光源氏があたかも仙界の者として描かれているようにも思うのである。この後、頭中将は須磨を去る際に、「あかなくに雁の常世を立ち別れ：」（②二五頁）と詠み、光源氏の住む須磨を「常世」として賞賛する。「常世」（仙境・黄泉国）的な場はここにもすでに語られていたといつてよい。

「うちやつれて」いるにもかかわらず、きわめて「きよら」である光源氏。「山がつ」めいた姿が「きよら」と記される源泉には以上のような服装、「山がつ」の超人的な性格が関連するのではないか。この場面においても「くめく」として語られるのは、多面性を持つ光源氏の姿が名付けようのないものであるところに起因するのであろう。

ところで、頭中将から見ても、光源氏の住居は中国風で「絵

に描きたらむやうなる」「所のさま」をしていたという。絵合巻においても光源氏が「おぼえぬ山がつ」として須磨・明石流離の姿を回想し、須磨を流離したからこそ絵心を体得したとの言は、これと無関係であるまい。さらに、須磨での「山がつ」としての光源氏の侘び住まいを目撃した頭中将に對して、絵合の場でこれ以上の効果を持つ絵はない。梅壺方の勝ちに決定的なものとなつたわけである。

しかも、絵合は冷泉帝の御前行われた。この絵日記は、伊井春樹氏の言われるように「表面的には梅壺方を勝利に導き、冷泉院の愛を確固たるものにするともに将来の立后を保証する役割があつたが、もう一つは藤壺に須磨明石での勤行に明け暮れた生活を見せる意義も担」う。と同時に、冷泉帝に見せる意義もあつたろう。というのは、光源氏は須磨に退去する前、「いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつにして」との和歌を冷泉帝に贈っていた。かつて「時うしなへる山がつ」であつた光源氏は、「時」を手にして、「春の都の花」を今まさに見ているのである。幼かつた冷泉帝がそのことを記憶していたかどうかは問題ではない。物語は、光源氏という「山がつ」が復活した様を改めて絵合巻に表現したといえるであろう。それは、朝顔巻で、光源氏の容貌を「山がつ」に、冷泉帝の容貌を、「いにしへの世にも並ぶ人なくや」と對として語っていることも密接にかかわつてこよう。光源氏は、須磨巻において、冷泉帝に向かつて「山が

つ」として身を処すことを宣言して別れた。だからこそ、絵合巻においても、朝顔巻においても光源氏は須磨での生活を「山がつ」と語ったのである。

以後、物語では、光源氏が「山がつ」としての須磨での生活を回想することはない。そのことから、完全に須磨流離が過去のものとなった（物語内で消化された）ことが読みとれるのではなからうか。

三

もう一人、須磨巻において「山がつ」として描かれる人物がいる。それが、明石の君である。

光源氏が須磨に自ら退去したことを聞き、明石入道は娘を縁づけたいとの旨を北の方に話す。

（入道）「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦のものしたまふなれ。吾子の宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君に奉らむ」と言ふ。母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山がつを心どとめたまひてむや」と言ふ。

（須磨②二一〇頁）

北の方は、「やむごとなき御妻ども」を多く持ち、「帝の御

妻」と関係したことで須磨を流離する源氏が、「あやしき山がつ」である娘に興味を持つはずがない、と反対する。明石の君自身も、「高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。」（須磨②二二頁）と、身の程を思い知り、将来は尼になるか、海の底に入ってしまうかと考える。ここで、明石の君が出家だけでなく、「海の底」（入水）を視野に入れるのは、父入道に「もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」（若紫①二〇四頁）と言ひ聞かされていたことによる。

その点を勘案すると、先程の母北の方が明石の君を「あやしき山がつ」と言った言葉が不自然に物語に響いてくる。もちろん、身分差ゆえに卑下して「山がつ」にたとえたことは言うまでもないが、「海」の女君である明石の君が、「海女」ではなく、「山がつ」に比されたのはなぜなのであろうか。

『源氏物語』において、「山がつ」として比喩される人物はそう多くはない。最も多いのが、玉鬘であり、次に光源氏、明石の入道、明石の君となる。

明石の入道は、光源氏を明石に招き入れた後、光源氏に娘を妻合わせたい内意があることを告げる。

「……前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたもちたまへりき。

みづからかく田舎の民となりてはべり。次々々のみ劣りまからば、何の身にかなりはべらんと悲しく思ひはべるを、これは生まれし時より頼むところなんはべる。いかにして都の高き人に奉らんと思ふ心深きにより……」

(明石②二四五頁)

入道自身は「前の世の契り」の拙さにより、「口惜しき山がつ」となったが、父親は大臣でもあった。娘を「都の高き人に奉らんと思ふ心深」く、その相手として光源氏が選ばれたわけである。「口惜しき山がつ」とは、もちろん、もともと三位中将でもあった自分が、明石の一受領となったことを卑下した表現である。登場人物の思ひはそれとして、ここで注意されるのが、入道と対座する光源氏も、「山がつ」として須磨に下ったという事実である。しかも、光源氏も須磨に流離する原因を「とあることもかかるとも、前の世の報い」(須磨②一六五頁)としても考えていた。ここには、前世の因縁によって「山がつ」としての生活を送る人物が対座する場が設けられている。

明石の入道によって、娘を嫁がせたいとの願いが北の方に明かされたおり、北の方は娘のような「あやしき山がつ」に目をとめるはずがないといつて反対していた。だが、すでに物語の表現上、「山がつ」として通底する光源氏と明石の君が結ばれる運命にあることは言うまでもないであろう。へあやし」の「山がつ」めいた光源氏が、「あやしき山がつ」明

石の君を妻とする構想がすでにここで完成されている様を讀むことができるからである。

「あやしき山がつ」明石の君、が、「あやしの山がつ」光源氏によって、からめとられてゆくのは、言わば物語の必然であったと思われる。

四

須磨巻において、光源氏が比されるのは、「山がつ」だけではない。「山がつ」であったり、「雁」であったり、「月」であったり。「月」については既に論も多いが、行論上、須磨・明石巻における「月」について見てゆきたい。

例えば、須磨行きの前に、花散里のもとを訪れる場面。

……鶏のしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。

例の、月の入りはつるほどよそへられて、あはれなり。

女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を

ぬ光を

いみじと思いたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空
なながめそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたま

ひぬ。

(須磨②一七六頁)

花散里のもとを急ぎ「出でたまふ」光源氏の姿に、「月の入りはつるほどよそへられて」、思わず女君側から和歌を詠みかけた。ここでの「月影」とは光源氏のことをさし、光源氏もそれを受け和歌を詠む。「曇らむ」「月影」は、光源氏の不遇の姿であり、源氏は花散里に、曇る月の空を眺めることを禁じる。「月影のやどれる袖」を持つ花散里は、光源氏を包みこみ、彼の行末をにぎる女君として描かれる。花散里が、月を見るタブーを犯すことはない。

思えば須磨巻の月は、光源氏の動向とともに語られることが多い。

・明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。

(須磨②一六七頁)

・出でたまふほどを、人々のぞきて見たてまつる。入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、……

(須磨②一六九頁)

・月待ち出でて出でたまふ。

これらは直接光源氏をたどえたものではないが、光源氏に通うものであることは言うまでもない。有明の月の頃、光源氏は様々な人々に別れを告げ、須磨へ下る。

須磨の地においても、光源氏は月を見て都に思いをはせる。月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめた

まふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦したまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど言はむ方なく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなくさむめぐりあはん月の都は遙かなれども

(須磨②二〇二―二〇三頁)

十五夜の夜、月を見て都に思いをはせる光源氏の姿に、『竹取物語』のかぐや姫が重ねられ、ずらされもしていることについてはすでに指摘がある通りである。かぐや姫は満月の夜、月の都に帰るが、現段階で光源氏は都に戻ることはなかった。光源氏は「有明の月」の時、都から須磨に下った。「有明の月」は、満月から序々に欠けてゆく過程の中、数日後までの月である。光源氏がかぐや姫と重なりながらも、都に帰還できない仕掛けの一つとして「有明の月」を背負っていたことがあるように思う。

光源氏が「山がつ」として描かれているのも、同じ所に収束される。須磨巻は、徹底的に欠損した主人公を描こうとしている。満ち欠けする「月」、飯を背負う「雁」、そして「山がつ」……。須磨行ききの準備をする光源氏の姿は、まず語り手によって「あやしの山がつめく」何者か、畏怖の念を抱かせた異形のものとしてとらえられていた。さらに頭中将は、光

源氏の「山がつめく」姿を「きよら」と感じる。欠損する「有明の月」であり、「曇らむ月影」であり、異形の「山がつ」となった光源氏が、都に帰還できるのは、「月」であれ「山がつ」であれ、それらが両義的に物語の中で響き合っているからであろう。「月」は忌むべきものであり、めぐるものであり、「月（の光）」は皇統の喩でもあったように、「山がつ」は貴族にとって異界の者であり、神（マレピト）もしくは仙人でもあった。須磨流離の際の光源氏造型は、表層の意と深層の意で揺れる様々な「ことば」にからめとられる形で描かれているといえよう。

注

(1) 例えば、『宇津保物語』「四方の海に玉藻かづきし海人しもぞ荒れたる波の中も分けける」(藤原の君①一八〇頁)の和歌にあるように、「四方の海」に精通しているのはやはり「山がつ」ではなく「海人」であろう。

(2) 根本智治「須磨での生活——山賤としての光源氏」(『王朝文学史稿』平成八年三月)。須磨巻を含め、『源氏物語』の「山がつ」の歌語としての機能を論じたものに、上坂信男「源氏物語の和歌的心象——「あま」と「山がつ」を軸に——」(『日本文学』昭和四十八年十月)がある。

(3) 津島昭宏「光源氏と山がつ——玉鬘との関わりにふれて——」(『物語文学論究』平成十三年一月)

(4) 折口信夫「翁の発生」「山の霜月祭り」「鬼と山人と」(『折口信

夫全集』中央公論社)

(5) 注(3)に同じ。

(6) この物語で自称の場合「くめく」とは、用いられていない。

(7) 新編日本古典文学全集(小学館)現代語訳。

(8) 「すまのあまのしほやく煙」和歌の基層とその表現性については、本田恵美「須磨の海人の塩焼く煙」考——『伊勢物語』一

一二段の和歌の位相——(『国語国文 研究と教育』第三九号平成十三年一月)に詳しい。

(9) 清水好子氏は、「海人の煙を想起する所に、「思はぬかたにたなびきにけり」という行末が、あるいは源氏の身に訪れはしないだろうか」(『源氏物語と歌——「須磨」「明石」と続くこと——」(『王朝物語とその周辺』笠間書院 昭和五七年三月)との読みを提示される。

(10) ここの「山がつ」が柴を焼く姿に、中国における「燔柴」の儀が想起されることについては、拙稿「燔柴」する(隠天子)——須磨巻の光源氏の一性格」(『共立女子大学文学部紀要』平成十六年一月)で考察した。

(11) 高橋亨「唐めいたる須磨」(『物語の絵と遠近法』ペリカン社平成三年九月)

(12) 『孟津抄』(『源氏物語古注釈書集成』桜楓社)

(13) 『漢書』「律歴志上」に「黄者、中之色、君之服也」とある。下襲が「黄」であったという所に、隠れた君王の姿を読むこともできようか。「青衣」は後に貧者の衣ともされ、この場面の光源

氏の衣服については、今後の課題としたい。

(14) 長谷川政春氏が「文学・芸能の上に顕著な現象である主人公のやつし姿、またやつしの精神も「まれびと」概念の延長線上にあ

るもの」(『國文學』七月臨時増刊号 平成七年七月 學燈社)と
いうように、ここでの光源氏の「やつれ」た姿に「マレビト」を
想定することも可能であろう。だからこそ「きよら」であるとい
える。他に、神野藤昭夫「『源氏物語』の表現方法としての「や
つる」(「やつす」)——異装・交通・時空」(『源氏物語の思惟と表
現』新典社 平成九年)

(15)伊井春樹「須磨の絵日記から絵合の絵日記へ」(『中古文学』第
三九号 昭和六二年五月)

(16)注(3)に詳しい。

(17)もちろん、光源氏の須磨流離の原因は多義的に描かれている。

(18)明石の君は、少女巻で「女の中には、太政大臣の山里に籠めお
きたまへる人こそ、いと上手と聞きはべれ。物の上手の後にはは
べれど、末になりて、山がつにて年経たる人のいかでさしも弾き
すぐれけん。」(③三四頁)と、頭中将の会話文の中で「山がつ」
としてとらえられる。

(19)鈴木日出男「月」(『源氏物語歳時記』筑摩書房 平成元年)、
高田祐彦「光源氏の復活」(『国語と国文学』平成元年二月)、高
橋亨「源氏物語の〈光〉と王権」(『色好みの文学と王権』新典社
平成二年)、河添房江「古今集の光の讃頌」(『源氏物語表現史』
翰林書房 平成十年)など。

(20)この箇所は、光源氏が自分自身で「月」によそえて「あはれ」
に感じると理解され解釈が分かれるが、どちらにしても、「月」
に光源氏をなぞらえていることには変わりはない。「例の」とも
あり、花散里の思いと読むのが自然か。

(21)長谷川政春氏は、物語の主人公が、「劣り腹か落胤の皇子皇女
であったり、罪を犯したりという欠損をもった、いわば正統なき

貴種であり、異端の貴種たちであった」(『物語史の風景』(『物語
史の風景』若草書房 平成十年七月))と、「欠損」という属性を
持つことを述べておられる。

(22)小嶋菜温子「光源氏とかぐや姫」(『源氏物語批評』有精堂 平
成七年)

(23)注(19)論文参照。

※「宇津保物語」、「源氏物語」本文引用はそれぞれ、新編日本古典
文学全集(小学館)による。

(おかだ・ひろみ 共立女子大学専任講師)